



# 奥田亡羊年譜

## 奥田良胤

一九六七(昭42) 0歳  
六月五日、京都市内で誕生。本名尚良(たかよし)。祖父は俳人・俳画家の奥田雀草。父の勤務地・大分市で育つ。三歳で大阪府に転居。

一九七六(昭51) 9歳  
夏休みに東京都世田谷区に転居。

一九八〇(昭55) 13歳  
横浜市の中高一貫校・私立聖光学院に入學。六年間バスケット部に所属、高二で主将を務める。多くの書物を読む。

一九八七(昭62) 20歳  
早稲田大学第一文学部入学。美術研究会に所属。

一九九一(平3) 24歳  
第一文学部史学科美術史専修卒業。四月、NHK入局。番組制作局教養・教育番組ディレクターとして京都放送局配属。仕事のため茶道、俳句を習う。

一九九七(平9) 30歳  
二月、毎日俳句大賞三位入選。その後、短歌を作り始める。

一九九九(平11) 32歳  
六月、高校生向け番組『古典への招待』制作で師・佐佐木幸綱と出会う。九月、「砂のダンス」で短歌研究新人賞次席。十二月、「心の花」入会。

二〇〇二(平14) 35歳  
七月、NHK退職。九月、貯えの続く間は働かないと決め、使われていない農家を借りて群馬県榛名山麓に転居。

二〇〇四(平16) 37歳  
篤志面接委員として少年院での短歌指導を始める(『二〇二四』)。資金が尽きて榛名山麓から東京に戻る。

二〇〇五(平17) 38歳  
『麦と砲弾』により第四八回短歌研究新人賞受賞。フリーディレクターとしてNHKこころの時代『とこしへの川』魂の歌人・竹山広『を制作。

二〇〇六(平18) 39歳  
『シリーズ牧水賞の歌人たち』に「佐佐木

幸綱』(青磁社)編著。

二〇〇七(平19) 40歳  
六月、第一歌集『亡羊』刊(翌二〇〇八年、第五二回現代歌人協会賞受賞)。

二〇一一年(平23) 44歳  
NHKこころの時代『無念も捨てたもんじやない』(出演・福島泰樹)制作。

二〇一四(平26) 47歳  
相模女子大学講師(『二〇二四』)。

二〇一七(平29) 50歳  
四月、第二歌集『男歌男』刊(翌二〇一八年、第一六回前川佐美雄賞受賞。現代歌人協会理事就任(『二〇二二』)。雑司ヶ谷の文化講座で四月から二〇二四年にかけて『源氏物語』全巻を講読。

二〇一九(平31) 52歳  
二月より朝日カルチャーセンター新宿教室短歌講座講師(『二〇二四』)。

二〇二一年(令3) 54歳  
早稲田大学講師(『二〇二四』)。十一月、第三歌集『花』刊。(翌二〇二二年、第二七回若山牧水賞受賞)。

二〇二四(令6) 57歳  
八月下旬、肺腺癌ステージ四の診断。

二〇二五(令7)  
四月十一日早朝、都内の自宅にて死去(享年五七)。第四歌集『虚国』を含む全歌集『ぼろんじ』を年内に刊行予定。

## 奥田亡羊君を悼む

佐佐木幸綱

奥田亡羊君が四月十一日に亡くなった。五十七歳だった。

お父上からメールで知らせて頂いたが、突然のことで、二、三の人に知らせたばかりで、どう対応していいか分からないありさまで、第一歌集『亡羊』の巻頭歌「宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かっている」を思い浮かべるばかりだった。

奥田君はNHKのディレクターとして私の前にあらわれた。一九九〇年代終わりだった。彼はNHK教育テレビでディレクターの仕事をしていた。「古典への招待」という番組で、高校生・古典愛好者がターゲットの三〇分番組だった。万葉集、古今集、和泉式部、西行といったタイトルでしゃべったようにおぼえている。

奥田君は、それ以前から作歌していたらしいが、その出会いをきっかけに「心の花」

に入会。本格的に作歌をはじめ、やがて「心の花」の編集委員として腕をふるってくれた、雑誌にかかわる細かい仕事がよくできる人で、年表や図表を作る仕事も得意で、「心の花」の編集の仕事がどれだけ助けられたか、はかりしれない。

私は彼の第一歌集『亡羊』に「跋」を書いているが、そこで、彼の歌の特色を次の三点にまとめている。「①独特な映像感覚」「②新しい『男歌』の可能性」「③歴史への興味」。優れた才能を失ってしまったことが、なんとも口惜しい。

## 叫びに耳をすませて

佐佐木定綱

「金太郎始みたいになりたいんですよ」と亡羊さんは言った。なにを言ってるんだこの人は。「いつなんどきどこを切っても」奥田亡羊“そうありたいんです”と。

『人間の暗闇』というホロコーストの本を読んだと話したら、「『SHOA』と

いう映画は見ましたか」と聞かれた。ホロコーストに関わった人々の証言を集めた映画で約九時間半。長過ぎる。

亡羊さんは暗い部分があるという見てしまいう人なのだ。人に深淵はある。それは仕方ない。だがやはり気に入らない。だから自分は常に暗い面も忘れず、隠さずに生きていたい。ということだったのかと思う。

宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かっている 『亡羊』

そしてそれは他人に対してもそうだったのだろう。深淵も含めて一人の人間である。おぞましさと誇り高さを同時に認めること。多分これは人間として最も切実な行為だ。そしてそれができる人間は多くない。亡羊さんは少ない一人だったと思う。

歌や言葉とはその寒さと暖かさのあいだからまれ出る、声にならない叫び声を拾い取る行為なのだろう。孤独の中でその声に耳をすませることの困難さ。歌を続けていく中で痛いほどわかってきた。いまの自分はまだ全然だ。それでも少しでも近づきたいと思う。ぼくの手の中にも行き場のない叫びがひとつ、残されている気がする。

# 奥田亡羊の三〇首

谷岡亜紀

## 第一歌集『亡羊』（二〇〇七年、短歌研究社刊）

宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かつている

自動販売機の光の蔭につつまれたコーラでもいい僕たちの明日

逆さまにビルから人が落ちてゆく顔まで見えて人はひとりだ

板塀に人と梯子の影はあり影を残して人はゆきたり

永遠に話し続けているだろう旅の途中は旅の話を

私の背に手を触れものを問いし人みな頷きて去りてゆきたり

自転車燃やせば秋の青空にばーんばーんと音がするなり

白き雲ながるる水を跨ぐとき巨人のごとく我は老いたり

## 第二歌集『男歌男』（二〇一七年、短歌研究社刊）

柿の木の下に子どもはよろこべり青く小さき柿の実の降る

地獄絵を好む少女となりしより肩の輪郭すずやかに見ゆ

牛伏<sup>うしふせ</sup>の山のふもとの教室に手を挙げおらむわれの娘は

たそがれは誰かさがしに来るような霧が流れてこは曳舟

たまにしか会えない父は遠く来て子の玉入れの入らぬを見つ

石の上に焚きし火のあと縄文の家族はここに首を寄せけむ

やさしさは遠くにひとを見るころ屋上に降る雨に傘さす  
月の夜を無蓋の貨車に運ばる誰のいのちか桃の花盛り  
振り向けば窓のひとつに君はいてすこし遅れてわれに手を振る  
子を胸に歩めばわれの知らざりしやさしさを見す人も世界も  
なにもない大地に風が吹いていた つかばくらがよろこびます  
ように

## 第三歌集『花』（二〇二一年、砂子屋書房刊）

稲妻のひらめく闇に掻きあつめ／掻きあつめ抱く人形の四肢

おぼろなる体にいのち灯しつつ／ホロンバイルに降る雪を聴く

廃屋となりて朽ちなば／野に凄き夕映えうつす鏡のこさむ

鯛を手に桜の尾根を下りゆく夢を見ていし父となる日に

青空に入道雲が立ちあがり何変哲のなき日なりきようは

メリーゴーラウンドの光の渦に妻は子をしんと抱きて流れゆきたり

前の世も来む世も離ればなれにて子を抱きつつ見るお月さま

カニグラタン食いたがる子と食わせやるわれと夢にてあわく会いたり

## 「心の花」二〇二五年五月号

よるべなき思ひに懼の手を垂れて春となる日の葦辺にねむる

## 「短歌研究」二〇二五年五・六月号

百メートル歩きて休み歩きてはまた休みたり空に息して

花のごと来たりて流れゆくものをここに見送る見送られつつ

# 奥田亡羊さんの死を心より悼む

## 伊藤一彦

あまりに悲しい追悼文である。よもや自分より若い奥田亡羊さんの追悼の文を綴ることになるとは夢にも思わなかった。奥田さんの知性的な鋭い表情、また人なつこく優しい表情がいくども目に浮かぶ。私たち「心の花」の者にとつても、短歌界にとつても大きな宝を失つてまことに残念である。意欲に満ちていた彼自身が何よりじつに無念だったろう。

「心の花」五月号に奥田さんの歌が出ているのを皆さん読まれたと思う。次は七首のうちの三首である。

・よるべなき思ひに權の手を垂れて春となる日の葦辺にねむる

・あられなき人の姿も見たりしと梅の匂へる夜更けに思ふ

・さざんくわの紅く散りしく土の上に立ちてしづけく狂ふさざんくわ

「よるべなき思ひに權の手を垂れて」の痛切な表現に胸をえぐられる。「あられな

き人」とは私は奥田さんが自身のことを詠んだものと解する。そして、紅い「さざんくわ」が「しづけく狂ふ」とは絶唱と思う。昨年の九月二十日に奥田さんから葉書をいただいた。じつは群馬県みなかみ町から短歌の指導者を推薦して欲しいという依頼を受け、奥田さんなら理想の講師だと考えてお願いし、昨年すでに何回か指導に出かけてもらっていたのである。丁寧なお詫びの葉書だった。「みなかみ町の皆様ととても楽しい時間をすごさせていただいています。少し体調を崩してしまい長期入院をすることになりました。年内いっぱい養生して、早めに回復してみなかみの方々にもご迷惑をおかけしないようにします。心の花の編集もその間お休みさせていただくことになりました。ゆっくり勉強しなおす時間に当たたいと思います。」心配をかけまいとする奥田さんらしい心遣いの文面である。その後、他の人からも奥田さんの病状

について聞くことがあったが、本人も回復すると信じ治療に励んでいるという話が聞こえていた。そう信じていた矢先の四月十一日の突然の訃報だった。

奥田さんと私が初めて親しく話したのは二〇〇八年だと思う。「心の花」の歌人をインタビューしたDVD制作のため宮崎を訪ねてくれ、あれこれの話で盛り上がった。いっぺんに彼を好きになった。翌日は「心の花」の宮崎歌会にも出席して、たちまち彼のファンが増えた。

一昨年の第三歌集『花』による奥田さんの第二十七回「若山牧水賞」受賞は嬉しかった。選考委員の一人だった佐佐木幸綱さんは、『花』のテーマと題材の豊かさを指摘し、その上で「バラエティーに富んだ題材は、型に縛られない人生を送ってきた奥田さんの経験が反映されたものだろう」と述べた。最後にみなかみ町で絵葉書になつてゐる奥田さんらしい歌を引ききたい。

・つくねんと地蔵立ちおり花や葉をばさつと落とす桜木のした

亡羊

遺された奥様とお子様のご自愛を切にお祈りします。

# 師風への挑戦

## 矢部雅之

奥田亡羊がかつて暮らした家でこの文章を私は今書いている。こころは、二〇〇八、一四年に彼が住んだ家なのだ。自分が今暮らしているのと同じこの空間で彼が、家族を持ち子らを育み日々の生活を送っていたのかと考えると、不思議な気持ちになる。

彼の足音が今でも聞こえてくるかのようで。

奥田亡羊と私のつきあいはもう二十五年以上になる。若い頃、私たちは、周囲の人たちから「ライバル」のように見られることが多かった。年齢が近く、「心の花」編集部に十年間近くともに居たということが理由だったろう。だが、当人たちは、もっと別の意味で「最大の好敵手にして盟友」と互いを見なしていた。「師である佐佐木幸綱への挑戦者同士として」という意味においてである。

私たちの前には、幸綱という巨大な師の存在があった。その圧倒的な影響の重力圏に飲み込まれずに、歌詠みとしての自分独

自の方法論を見出し、それを鍛え上げていきたい。この渴望の強さの点において私たちは互いを認め合っていたように思う。私たちは、論作の両面においていかなる独自の道を相手が探っているか、互いを常に注目し意識しあっていた。

やがて私は、社会詠や時事詠を一切詠まず、大状況の中に自らを肉体ごと放り込み、身の周りの小状況だけに集中することで間接的に大状況を詠む、いわば「一点突破」の方法論に賭けるようになった。一方、奥田亡羊はより正面から師に向かっていくことを選んだ。師佐佐木幸綱の、そしてその向こう側にいる信綱の、「言葉に対する厚い信頼」の解体に挑むことに腹を据えたのだと思う。その過程で彼は、幸綱の代名詞「男歌」を茶化すかのような歌集『男歌男』を編みさえした。「男歌」という言葉は奥田亡羊には「信頼と肯定の歌」を意味していた。そして、閉塞感の増す現代において

なお「男歌」は可能なのか、というのが彼の問題意識だったのである。

この『男歌男』の試みには、「心の花」の身内からさえ「師に対して失礼ではないか」との声が上がった。だが、師佐佐木幸綱への厚い信頼が『男歌男』の根底にはあった。病床の奥田亡羊をその死の二日前に私が見舞った時にも、そのことを懸命に彼は語っていた。「男歌男」は、巨人幸綱への彼の誠意であり、幸綱という巨大な岩壁の向こうに到達するために辿らねばならない彼の登攀の苦闘だったのだ。「失礼」の一言でそれを片付けるのは話が些か単純過ぎる。師風への挑戦もせずして何が師弟か。世代間の闘いなくして何が芸術か。

私がこの原稿を書いている今日六月五日は奥田亡羊の誕生日である。闘病中の彼にせめて誕生日までは生きて、誕生日の贈り物を受け取って欲しい、それが私たち友人チームの願いだった。その贈り物とは、現在準備中の奥田亡羊全歌集『ぼろんじ』である。この願いは叶わなかったが、『ぼろんじ』刊行に向けチームは引続き取り組んでいる。この本が、奥田亡羊と読者の新しい出会いの契機となることを願いつつ。

# 永遠と旅

奥田亡羊さんと初めてお会いしたのは、二〇〇二年の東京で行われた全国大会の時だったと思う。歌会の会場に着席していた時に、「はじめまして」と声をかけてくださった。私の目線にしゃがんで話してくださり、言葉遣いもとても丁寧な方だなあとというのが第一印象だった。

やがてどなたかの誘いで、私の地元のコミュニティセンターが会場の同世代の勉強会に参加されるようになった。勉強会では筑摩書房の『現代短歌全集』や仲間が出版した歌集を読み合うのだが、奥田さんの発言は、はっきりしていながらも短歌や作者への思いがこもったあたたかいもので、いつも勉強になり、刺激を受けていた。その頃はさつぱりと剃髪されていて、初対面の時とイメージが随分違ったので驚いたことを覚えている。

奥田さんは人を楽しませるのが好きなユーモアのある方で、奥田さんがいらっ

## 横山未来子

しゃるとその場が明るくなる。いつの新年歌会だったか、当時の若手何人かで題を出しあって作った短歌を、大きな紙に書いて発表するというアトラクションをしたのだが、その企画も奥田さんが主になって立ててくださったと思う。そういう時にてきばきと物事を決めて実行できるのは、テレビディレクターという経歴をお持ちだったからだろうか。本番では、進行役の奥田さんが白衣を着た「博士」になってユーモラスに短歌を紹介し、会場が盛り上がった。準備中もみんなで紙をひろげてマジックで書いたり、まるで文化祭のようでも楽しかったことを思い出す。

奥田さんが二〇〇七年に第一歌集『亡羊』を出版された時には、勉強会の仲間で読書会をし、二次会の席で歌集にサインをしてもらった。今、その『亡羊』を手にとって眺めているが、見返しの黒い紙によく合う銀色のサインペンで、ていねいな文

字が書かれている。リクエストして書いてもらった一首は、〈永遠に話し続けているだろう旅の途中は旅の話を。不思議な静けさとやすらかなさのある一首で、大きな時間の流れを感じる。〉

最後にお会いしたのは、勉強会の仲間と井の頭公園で吟行会をした昨年の十一月だった。夏頃から企画して日程も決めていたものだった。奥田さんは治療中だったので参加は難しいのではと思っていたのだが、予定通り参加してくださった。小雨の降る中だったが皆で一時間ほど園内をめぐり、コミュニティセンターで歌会を、カフェで二次会をした。コロナ禍の数年間リアルに集まることが出来なかったので、貴重な一日になった。あの日奥田さんとご一緒にきて、本当によかったと思っている。

奥田さんは編集部宛てに原稿でメールが届くと、全てに丁寧な返信をされていたという。私の「選歌ルーム」原稿への返信にも、いつもひと言感想を書いてくださった。今も原稿を送る時、奥田さんだったらどんな風に読まれるだろう、と思い、あのかすかな緊張感を思い出す。

奥田さん、ありがとうございました。

## 黒石剛仁

・三階の窓辺に抱けばまぶしそうに目を細めおりこれが世界だ 『花』

いつだったか、奥田君が娘さんを「心の花」の編集に連れて来たことがある。東急大井町線の車中に並んで座り語らっている奥田親子に気付いた。二子玉川駅のホームで紹介されて挨拶を交わした。幸綱先生との打ち合わせがある私は先に先生宅に向かったのだが、これから食事をするという奥田君がとても嬉しそうだったことが印象に残っている。

思えば、奥田君はいつもしかるべき〈世界〉を胸に描いており、それを人と共有しようと努める人だった。自らが生み出す短歌作品でも、「心の花」の編集メンバーとして会員に原稿を依頼する場合でも、決して手を抜くことはなく、妥協もしなかった。そんな奥田君を頼もしいと思いつつ、いくらかの危うさも感じていた。奥田君、これまでお疲れ様でした。そして、有難う。

## 鈴木陽美

・眠る子に読んで聞かせる物語ふえるじなんどはやさしき牡牛 『男歌男』

手元の『男歌男』を開くと書きのサインと共に「2017.26」の日付がある。この日に何があったのか。池袋の勤労福祉会館がKE・Bizの名でリニューアルした後、の会議室で『男歌男』を読む会が開かれた。奥田さんのほかの参加者は女性ばかり一五名。事前に提出した一首選について評を順番に発言していくスタイルだった。わたしは引用の歌を選び、「ふえるじなんど」の物語Ⅱロングセラールの絵本『はなのすきなうし』を図書館から借りて持参した。この歌集にあつて「やさしき牡牛」の物語であることも何か暗示的だと、ジェンダーとからめて評をしたのだと思う。

『男歌男』には一葉の写真も挟んである。ホテルメトロポリタンに場所を移しての食事会での集合写真だ。中央に座る奥田さんを囲んでだれもだれもが微笑んでいる。

## 岸並千珠子

・自転車に乗りて自転車より速く走り去りたる男歌男 『男歌男』

『男歌男』とは「現代を生きるちよつと滑稽な男」とある。その装丁を依頼されたときイラストは私ではなく奥田さんご本人が描いたら面白いと思い、三センチ四方のカットを数点お願いしたところ一点がA4用紙いっぱい口のケツとや地球のイラストが十数点出来上がった。美しく大きな文字を書く人だがイラストも大らかな線で想定外に大きくて笑ってしまった。また、どうすれば活気のある歌会になるかを常に考えている人だった。時にはわざと悪役を演じていたように思う。そのトリッキーな歌評が、そのボーカルフエイスが、本気なのか冗談なのかを解り難くしていた。『男歌男』とは美学と哀愁の人だと思う。掲出歌のようにすべてを残し身ひとつで駆け抜けて行ってしまった。それは本気が冗談か。どちらにしても到底受け止めきれない。

## 高山邦男

・逆さまにビルから人が落ちてゆく顔まで  
見えて人はひとりだ 『亡羊』

『亡羊』は奥田さんらしい才気が感じられる歌集だが不穏だ。そもそも木箱に花が詰め込まれている表紙の装丁は棺桶を連想させて不吉である。今までの自分を葬るというイメージだったのかもしれない。「明日もまた何もするなと言うような私自身の夕暮れである」のようなどん底の自分や人間の原点に立っている視線がこの歌集の魅力である。冒頭の一首はいざ意味に落し込んで解釈しようとするとうまく分からない所が多いのだが印象的な作品。実景とは読めないが、暗喩のようでありつつ映像的にリアル。歌集全体を覆う暗さは、青春期待有な暗さではなく、とことん物事を突き詰めて考える奥田さんの思考のなせる業なのだと思う。そして、この歌集以降もそのとことん考え抜く思考こそが奥田さんの本領であり歌の力だったと私は考えている。

## 藤島秀憲

・炎天に汗拭いつつ円谷幸吉の遺書のような礼を言う人 『亡羊』

「困るじゃないか」と思っている。文学にとつて、短歌にとつて、「心の花」にとつて、私にとつて、大切な人が逝つてしまった。「心の花」に入つた時から、奥田さんの広い背中を見ながら短歌を続けてきた。こののち、何を見ていればいいのか。

『亡羊』が出る前の年だから二〇〇六年、奥田さんと私は一日一首をメールで交換し合っていた。どちらかが題を出しての題詠だった。その時に交し合った歌が『亡羊』にあり、私の『二丁目通信』にある。批評を交したことはないの、たくさんさんの歌を作るための場であった。

そのころ奥田さんはNHK学園に勤めていて「いま、変な人と歌を交換している」と周囲に言っていたらしい。現在は私がNHK学園にいる。当時を知る人から時折その話が出る。変な人とは困るじゃないか。

## 野原亜莉子

・稲妻のひらめく闇に掻きあつめ掻きあつめ抱く人形の四肢 『花』

奥田さんは意外と人形好きで、展示会にも何度か来てくれた。ハンス・ベルメールの性的で猟奇的な人形写真の話を熱心にしていて。人形に聖性を求める私とは意見が合わずいつもケンカばかり(笑)。だけど安心して言いたいことを言える唯一の男性だったかもしれない。

奥田さんの人形の歌はエロティックで、人形制作者としてはちょっと落着かない気分になる。五体を繋ぎ合わせて出来る人形は簡単にバラバラになり変幻自在だ。感情のない、肉体だけの存在が持つ自由奔放なエロス。奥田さんは人形の中に女性を見、女性の中に人形を探していたのかもしれない。私にはたどり着けない人形の歌に、私は永遠に当惑する。

返歌・両の手にちからを込めて磨きやれば人形の四肢汗ばみ始む(亜莉子)



## 本田一弘

・子を胸に歩めばわれの知らざりしやさしさを見ず人も世界も 『男歌男』

「やさしさ」の塊のような人だった。「だった」と過去形で書くのが悲しすぎる。年は私より二つ年上で、兄のような存在だった。会うといつも笑顔で優しく私に声をかけてくれた。「本田さんに触るとビリケンみたいに御利益がある」などと冗談めかして言い、体を触ってきた。選歌ルームの原稿を送るといつも丁寧なコメントを呉れた。じつにあたたかい心、そして言葉の持ち主だった。亡くなった後になってから、奥田さんが残していた Youtube の映像を見るようになった。様々な言葉を残してくれたが、中でも次の言葉が心の底に染み渡ってくる。「何を成したかではなくて、人は人にどれだけ優しくなかったかということですか、最後自分をはかれない」(奥田亡羊さんの本棚「ドキュメントシリーズ」つながる本棚第二章)。ほんとうに優しい人だった。

## 松本実穂

・泥氷<sup>どろこ</sup>の枯野に影を散らしつつ鳥はいづへに命を終ふる(「心の花」二〇二五年一月号)  
昨年九月末、有志での Zoom 勉強会の題詠十五首に出詠された一首で、この時から表記が旧カナになり、詠風に変化が出た。奥田が一年かけて編んだ小見山輝遺歌集『花祭』の〈たそがれの草生をわたる鳥の影鳥はいづへに命を終ふる〉が元歌だ。自身の病名を知り余命を悟ったであろう九月、小見山の歌の力を借りながら自分の境涯を俯瞰しつつ詠んだと思われる。

療養中も今年二月まで毎月勉強会に参加し、以前と変わらず饒舌、時に毒舌だった。四月に一日一首が企画され、奥田の出詠も二首あった。「奥田さんの歌を引いて返歌の形で詠む」という仲間に賛同し、毎日奥田の歌を一首引き三十首詠んだ。その半ばに訃報が届いたが、歌を詠み続け、仲間の挽歌を読むことが癒しとなり支えとなり、そして弔いとなったのであればと振り返る。

## 梅原ひろみ

ふるさとはながさくちちであるははである (蓮花寺句碑)  
・生後百日目に父を亡くした雀草の父がその句に花として咲く 『花』

祖父奥田雀草の句碑を淡路島に訪ねた連作「花として咲く」より。雀草は淡路出身、京都で口語自由律の俳誌を主宰した。「ふるさと」は雀草の句であり、亡羊の曾祖父母が詠まれている。曾祖父は大覚寺で学んだ華道家。「花」には自身の子を詠んだ歌も多く、奥田家五代の時間が流れている。

が、何をしている奥田亡羊、ひとり逆縁ではないか。五十七歳、これから更に大輪の花を咲かせる正念場ではなかったのか。とはいえ時間は瞬くうちに過ぎてしまうのだらう。いま彼を悼む多くの人達もあつという間に鬼籍に入り、五代先の子孫が、あるいは遠い誰かが、歌を通して、かつて存在した奥田亡羊という、陰影に富んだ花ある歌人に新たな思いを馳せることだらう。

## 加古 陽

・そうすべて嘘だったんだ／眠りゆく枯野の舟に花はあふれて 『花』

初めての歌集『夜明けのニュースデスク』を編むとき、奥田亡羊さんに助言を頼もうと決めていた。ところが彼は、あまり乗り気ではない様子だった。曰く「私が適任かどうか」「男女のペアの方がやりやすい」等々。それまでにかかわったのはすべて女性の歌集で、男だとうまくないというのだ。しかし、歌稿の原案を渡すと、がぜん本気モードに入った。一昨年の八月に始めて歌稿の完成まで十一月。細部まで徹底したやり取りを通じて鍛えられたと思う。

病を知ったのは昨年九月だったか。こんなに早い死は想像でできなかった。最後のメールは今年四月五日、死の六日前のことだ。筑紫歌壇賞に決まったことを伝えると、間もなく祝意と期待を込めた返信が届いた。緩和ケアを受けつつ、懸命に書いたものだろう。その気持ち、胸に重く残る。

## 田中拓也

・なにもない大地に風が吹いていた いかぼくらがよろこびますように『男歌男』

亡羊さんが亡くなられてから一月半が過ぎたが、まだ呆然としている。癌のことは知っていたが、こんなに早く亡くなられるとは思っていなかったからだ。

『亡羊』『男歌男』『花』の三冊の歌集を読み返しつつ、涙がこみ上げてきている。亡羊さんの声とともに一首一首が心の奥深くに流れ込んでくるのである。

初めて出会ってから約四半世紀。「心の花」の歌会や勉強会、編集などの場で沢山の時間を共に過ごしてきた。

東京歌会の筑波山吟行会の際には、下見のために山頂まで登り、ともに関東平野を一望した。東日本大震災の時に水戸に在住していた私を心配し、「うちに避難してください」と電話をくださったこともあった。今、亡羊さんと同じ時代を生きることができた幸いを深く噛みしめている。

## 大口玲子

・宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かっている 『亡羊』

佐佐木幸綱研究室で初めて会った時、お互い早稲田の学生だった。まだ「亡羊」ではなく、連絡先を渡されたメモの「奥田尚良」の筆跡そのものが第一印象。「心の花」入会直後に「まだ原稿用紙がない」と電話があり、お互いの実家が至近だったので池上線の雪が谷大塚駅で待ち合わせた。ホームに現れるなり地元の高格式高いパティスリーのケーキを「御礼です」と手渡されて、過剰なうやうやしさに戸惑った。牧水賞受賞で宮崎に来た時は、高校訪問に同行。「生徒達が体育館の冷たい床に座っているのに高い所から話せない」と舞台を降りて立つたまま話をされた。十年以上前、「松尾あつゆきの手に入る資料すべて。ひとまず。亡羊」と分厚いコピーの束が突然送られてきた。頼んでもいないのに何が「ひとまず」だったのか、聞きそびれたままになった。

## 「追悼録」

西澤京子 奥田亡羊さんに初めてお会いしたのは、雑司ヶ谷地域文化創造館にて「窪田空穂のいのちの歌を読む」という講座が開かれた時でした。今から十二年前のことです。空穂の名前は知っていたのですが、どんな歌人かはよくわからず、講座に参加したいと思いました。

『冬木原』の長歌を読んでいた時、亡羊さんは感極まり声をつまらせました。まだよく理解できない私でしたが、激しい挽歌だと感じました。四回だけの講座の最終回に、亡羊さんと受講者のみなさんで雑司ヶ谷霊園の空穂のお墓をお参りました。確かこの時もお墓の前で涙ぐまれていたような気がします。帰り道、初めて会話を交わしたように覚えています。

しばらくして、また雑司ヶ谷にて「はじめての短歌」という新しい講座が始まりました。今度は短歌の実作を学べるということ、とても楽しみでした。上の句、下の句、切れ、比喩、倒置法など基本的なことを一から学び、その後は歌会に初めてチャレンジしました。十二名くらいの小さな歌会でしたが、亡羊さんの短歌に対する情熱に引き込まれ、歌会は五十回になるまで続きました。この場で私は短歌を詠む基本の力を育てて頂いたと思います。

もしもあのとき亡羊さんの講座を受けていなかったら、短歌と出会うことも出来ず、どんなにかつまらない人生になっていたかと思っています。

「短歌は自分を助けてくれるし、発見があります。自分がいかに何も知らなかったかと気づかせてくれます。人に贈ることも良いですね」とおっしゃっていました。こんなに早く他界するとは思っ

ておりませんでしたので喪失感が大きいです。本当に今までありがとうございました。

伊藤克子 病氣療養されていた、奥田亡羊さんがお亡くなりになりました。五十七歳というのは、早過ぎます。

私はインターネット歌会で奥田さんの第二歌集『男歌男』を読む会に参加したことがあり、「十首選」を書かせて頂きました。

二〇二三年十一月の「心の花」創刊百二十五年記念会のとき、私の前の席が奥田さんでした。奥田さんの隣りの男性が詠草集をスマホで見ていたのですが、奥田さんが後方からプリントアウトされた詠草集を持ってきて、手渡ししておられました。そういうさりげない気配りをされる方でした。

心よりお悔やみを申し上げます。  
新貝友子 「もう先生とは呼ばないでこれからは奥田さんと呼んで下さい。」<sup>2017</sup>年に「心の花」入会時に奥田さんから言われた言葉で

す。しかし、いつまでも奥田さんは私にとって「先生」なのです。豊島区の雑司ヶ谷地域文化創造館の短歌教室が終了して奥田さんの紹介で「心の花」の会員になりました。東京歌会で見せるはじけた感じで意見を述べる奥田さんに驚き講師の顔とは違う一面を見ました。

「あなたには家族詠が似合う」とよく言われました。どちらかと言えば社会詠が好きなのですが今は家族詠もチャレンジしたいと思っています。

一度だけ注意を受けたことがあります。「心の花」で他の方の歌が私の歌として載ったので少し不満を言ったらたしなめられました。編集の方々がどれだけ大変な思いであの「心の花」を作っているのかと力説されていました。

引越して東京歌会には行けなくなりましたが年に一度は奥田さんに会いに東京歌会に行こうと決めています。非常に残念です。奥田さんは永遠に私の「先生」で

す。

**谷ちえみ** 奥田さんと初めてお話しさせていただいたのは、東京歌会の二次会、中野の赤ひょうたんだったと記憶している。『嵐が丘』のヒースクリフについて語られて、こちらはその熱っぽさに気圧されて聞かばかりだった。

「心の花」一五〇〇号記念号で本田一弘論の執筆の機会をいただいたとき、奥田さんは歌集を持ち合わせているか気にかけてくださり、二冊お借りした。表には表れないこのようなお気づかい、橋渡しの役割やお骨折りを、ていねいに、確実に、気持ちよくなさる方だった。実はお借りしたうちの一冊にコーヒートをこぼしてしまったのだが、運よくビニールのカバーがかけある物だったので、きれいにふき取り何も言わずにお返しした。お伝えしたところできつと「そうでしたか、気づきませんでしたよ」と言ってくださったと思う。あるいは、いたずらっぽく「やつ

ぱり」とおっしゃったのだろうか。

二〇二三年、心の花賞奥田亡羊賞をいただいた際の賞品は、昭和十五年発行の『新風十人』であった。この古びた本は本棚の中から最長老の本として見守ってくれているように思っている。

今も歌会にひよっこりお見えになるような気がしてならない。あまりに早すぎて悔やまれる。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

**坂口弘** 奥田亡羊氏の突然の訃報に接し、驚愕しました。肺がんを患っていたとは全く知りませんでした。まだ五十七歳で働き盛りのピークといつてよい年齢でしょう。ご家族や同人の皆様の御悲嘆はいかばかりか、深く御推察し、お慰め申し上げます。

かつて心の花賞で応募作品を奥田氏に採って戴いたことがある私は、氏に特別の親しみを抱いておりました。彼の死を深く悼み、御冥福をこころよりお祈り申し上げます次第です。

**原口嘉代子** 奥田亡羊さんが四月

十一日に逝去されたと朝日新聞の訃報欄が伝えていた。五十七歳。

今後大いに活躍なさる方だった。私が「心の花」に入会したばかりの二〇〇四年、東京歌会の新年歌会で拙歌が一位になった。

五票の歌が三首あり、挙手によって決まった。選んでくださった五人の批評は好意的だったが、やはり奥田さんが手をあげ、三句「思はずも」がよくないと言ってく

だった。それから約二十年、私はこの歌について考え続け、昨年上半年した第一歌集『飛鳥』に「父の夢見しとふ人にせき込みて元気でしたかと問ひてしまへり」と改作し収載した。奥田さんにいかがですかとお聞きしたかったけれど、すでに入院されていて果たせなかった。二十年前のこの一首により宇都宮さんが由幾先生に私の木曜会入会のご許可を頂いてくださったことを後に伺い、忘れられない歌ともなったのだった。

一昨年の「心の花」一五〇〇号

記念号の特集の一企画「こんなところに信綱歌碑」の実現に背中を押してくださったのは奥田さんと高山邦男さんだった。原稿締切間際になって、奈良県宇陀市のかぎろひの丘の柿本人麻呂歌碑を実現するために急遽現地へ行ったことも思い出されるのである。

奥田亡羊さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

**佐藤博之** 奥田亡羊さんが闘病の末、五十七歳の若さで亡くなられた。素晴らしい歌集や編集部内での献身的な活躍、そしてそのお人柄を振り返ると、この早すぎるお別れが残念でならない。

近年は歌会前の講話や歌会後の二次会で、東京歌会をいかに盛り上げていくかについて熱弁される姿が忘れられない。奥田さんの拝聴した多様な腹案については残念ながらその多くが実現を果たせないままであるが、私がWeberモート歌会で企画した三浦半島短

歌合宿などの取り組みについて、心の花の歌会とともに盛り上げていく企画として心強く応援して頂いた。私自身と、同様の気持ちを持つ仲間たちで、それぞれの歌会を盛り上げることが亡羊さんへの供養の一つと信じて、今後一層努めていきたい。

美帆シボ「心の花」に入会してから、帰国のおり東京歌会に参加した。あれは初めて参加した時だった。私の発言に鋭い批判をした青年がいた。きりつとした佇まいで、近寄りたがい雰囲気があった。奥田亡羊という名を知り、彼の歌に注目するようになった。

それから十年以上経っても、最初の印象が強烈だったせいか、私が短歌仲間とバリエで発行している「フランス短歌4号」に原稿を依頼したくても、躊躇してしまっただ。頼りの綱は梅原ひろみさんだった。彼女は「フランス短歌2号」の一首評に亡羊さんの歌集『花』の連作「切り石」から一首

を紹介した。

・清貧を洗って太き月光の中庭に  
さすル・トロネ修道院

連作の始めに「高校生自立支援

として埼玉県北部の定時制高校を  
まわる」との一文があるという。

若山牧水賞を受賞したこの歌集を  
入手できなかった私には梅原さん  
の評が良い手引きになり、亡羊さ  
んに原稿依頼の仲介をお願いした。

お陰で、二〇二四年に発行し  
た「フランス短歌4号」には亡羊  
さんによる3号の総評が掲載され  
た。全作品を丁寧に読んで下さっ  
たことが感じられ、短歌仲間への  
励ましになった。自分が発表した  
十二首から亡羊さんが取り上げた  
一首とその評を読んで、以前は短  
歌を辞めたいと言っていた人の顔  
が輝き、今も短歌を続けている。

昨年六月の佐佐木信綱祭に参加  
する予定を組んだ私は久々に亡羊  
さんとの再会を期待して、その頃  
のご予定を伺ったが、他の街での  
お仕事が入っていた。少年院での

短歌指導や外国名の生徒が多い定  
時制高校のお話を聞きたかった。

心からご冥福をお祈りいたします。

笠巻睦「ちはやふる神田沙也加

が飛んだ夜の雪の白さに咲く梨の  
花」二〇二二年四月東京歌会に私  
が出した歌だ。歌会でずっと票が

入らず、どうして伝わらないのだ  
ろうと悩み続けていたのだが、こ  
の歌に二票が入った。奥田さんと  
岸並さんだった。奥田さんは大変

美しい歌だと言っていますと  
下さった。心折れそうだった私は  
俄然やれる気がしてきた。奥田さ  
んが貴重な一票を投じて下さった  
のなら百票分だ。どれだけ励まし  
れたかわからない。心から感謝し  
ています。早すぎやしないか。

松澤誠 編集委員をされていた  
奥田亡羊さんが亡くなられたとお  
聞きして、兎に角びっくりしてし  
まった。体調を崩されており、  
「暫く編集作業からは外れます」と  
のご連絡をいただいたから、きつ  
とその内復帰されるだろうとばか

り思っていたので、大変残念な思  
いです。振り返れば、心の花の  
毎月の原稿入稿のやり取りだけ  
なく、二〇二三年十月発行の創刊  
一五〇〇号記念号においては、完  
成した書籍を事前に確認したいと  
のお話で、二〇二三年九月二十九  
日にわざわざ弊社にご訪問いた  
だき、完成間もない一五〇〇号記  
念号を三冊直接お渡ししたのが、  
最初で最後のお顔を拝見しながら  
の、やり取りになってしまいました  
た。またその際にご丁寧に手土産  
まで頂戴し、弊社の文具売店にも  
寄られ、万年筆のペン先調整をさ  
れたとその後メールにて、ご報告  
もいただきました。私のような協  
力業者の人間に対しても、常に、  
丁寧に優しく接していただき、メ  
ール等でも感謝のお言葉をいただ  
いていた事が忘れられません。本  
当に色々と有難う御座いました。天  
国でも創作にお励みください。ご  
冥福を心よりお祈り致します。

(松澤さんは株式会社オカモトヤ

の社員で、前任の小林修二さんから引き継いで「心の花」誌の発行に当たっておられます。」

**奥山かほる** 奥田さんの死を受けとめられない。私は二〇二一年に幸せにも、歌集『安息角』へのたいへん懇切な解説を書いて頂いた。その後書きに、宗教家のような気を放っておられる奥田さん、と記しているが、私はなぜそんなことを書いたのか。今思うと、世を超越しておられるような印象の私なりの表現だったのかもしれない。病気になる前からYouTubeでの発信の様子も又並々ならず落ち着いていて、死への恐れは感じられなかった。

病気の事を最初に伺った時、なにか元気になるお見舞いを差し上げたい、と知恵をしぼり、歌集の出版祝いに友人がくれて嬉しかった「まえはらの鰻おこわ」、これだ！と思いついてお送りした処、「とても美味しかったです」と円谷幸吉のようなお返事が来て、ヒヤリ

としたのはつい半年前。

奥田さんは困っている人がいると、惜しみなく助け舟を出してくれる熱血漢で、私も色々な親切を頂いた。私は私で、奥田さんは忙しすぎるので、それも高じて辞めてしまおうのではないかと心配したが、その目眩めく忙しさを綱渡りのように見事にさばっていくのが奥田さんだった。

愛嬢羊歩ちゃんや群馬の名門女子高に合格されたとき、卒業生の金井美恵子が好きだった私は、手持ちの詩集を入学祝にお渡ししたら、「僕が先に読んでから」と言われたのがまるで教育パパのようで面白かったのも、そんな昔の話ではない。

華のような奥田さんの存在の、その歌と文章のファンだった。奥田さん喪失の痛みは、癒える事がないだろう。

**竹井成美** 突然の訃報に、声を失いました。

牧水賞を受賞され、今後の活躍

が大いに期待された歌人の早すぎるご逝去は、あまりにも衝撃的でした。

一度もお目にかかったこともなく、「大分歌会だより」など、メールを通してだけの、尊敬する編集委員かつ歌人でした。

「心の花」編集部を通過して、どんなメールにも、必ず受領した旨の返信に、その都度温かい励ましのお言葉が添えられていました。

たまたま「心の花」一五〇〇号記念号で、木下利玄の別府での一首の執筆を担当することになり、メールを通して何度、疑問や質問などをしたことでしようか。

締め切りの一ヶ月くらい前には臆せず、未完成の三つの原稿のどれが記念号に相応しいかを打診するメールをお送りした折も、すぐに「これが良いでしょう」との返信があり、「心の花」の編集上の決まりに沿って手直し箇所を指摘され、松本実穂さんとも密に連絡

していたとき、完成原稿を仕上げ

ることができました。

さらに記念座談会でも、松本さんと感想を述べていただきました。

その後、恐れ多くも「私の自慢」の執筆を依頼された折には、煩雑な写真の合成に手を尽くしていただきました。

しかし、ちょうどその時期は、体調不良で編集委員を退任される頃だったことを、九月十六日の奥田さんの個人メールで知ることになりました。

そんな時も、メールの最後には、「私の自慢」で少し竹井さんのことがわかってきた矢先、少し残念です…全国大会などでお目にかかれるのを楽しみにしております」とありました。

十一月号に「私の自慢」が掲載されたときに、合成写真のお礼と、奥田さんのお弟子さん・新貝友子さんの大分歌会入会後についてのメールを差し上げましたが、返信はいただけませんでした。

その後の奥田さんの体調が気に

なりながら、「木下利玄没後百年」

を記念する三月号に、図らずも歌集『紅玉』論を執筆することになり、掲載された折には講評いただけたらと、メールを差し上げようと躊躇していた矢先の訃報通知でした。

今年の十一月の宮崎での全国大会で、お目にかかれるのを楽しみにしていた夢は、一瞬にして消えてしまいました。

短い期間ではありましたが、ひよんなことから「木下利玄」の歌評を通して、メールでご指導いただいた「心の花」一会員として、大分の地から、ご冥福を心よりお祈りいたします。

**峰尾碧** 藪蛇を書かなければならないが、奥田さんは初めデウスエクスマキーナとして現れた。

二〇〇〇年の先生の文部大臣賞受賞祝賀会の『アニメ』の書評スピーチを大間違いで幾人かに『アニメ』のみ頼んでしまった。スピーチ直前気づき真っ青になっ

ているときさつきまでスピーチは苦手だと震えんばかりだった奥田さんが急遽その場でそれは見事な『逆旅』評に切り替えてくれた。

同じく余すところなき『逆旅』評に替えてくれた大口さん。二人の底力と歌への覚悟、幸綱作への思いの深さに震撼とした。先生が奥田亡羊は裸になって言ってくれた。あれが批評だ、と言われた。が、あろうことか、あれほど共鳴して

聞いたスピーチを引用歌の一首、なめらかな肌だったつけ若草の妻ときめてたかもしれない掌はの他何も覚えていない。忘れてしまった幻の批評。どなたか覚えていらつしやる方はいませんか。

人を喜ばせるのが好きだった。楽しそうに膨大な心の花の仕事を仕掛け、こなし。啓蒙家によく熱心に本を勧めてくれた。最近のは読んで中で一番凄本だという『嘆異抄』だった。卓越した感性と知性、身についた法外な情報が反響しあう輻輳の歌は奥田さん自

身のように多彩で魅力的だ。凄みのある強烈なノスタルジアに痺れる。お子さんの誕生の歌の透明な美しさは忘れられない。最後に会った時後ろから、相変わらずお美しいといひざま肩をガツと掴んで振り向きもしないで前の方へ駆けて行った。その姿が真葛原を吹き分けてゆく疾風のようで後ろからきて鮮やかに駆け抜けていった奥田さんそのものに思えてならない。

**高山邦男** 奥田亡羊さんと初めて会ったのは黒岩剛仁歌集『天機』の出版記念会の時でした。三十年ぐらい前だと思えますが正確には分かりません。

その時、亡羊さんは丸坊主だったのでたぶんNHKを退社し隠遁生活を送っていた頃なのではないかと思えます。まだ年齢も若く下働きの二次会の幹事をされていたのではないのでしょうか。

学生時代からの友人である黒岩の会だから出席したので、二次会では少ししゃべらせてもらいたいと思っ

てお願いしましたが断られました。初対面だったので、ただの変な人と思われたのかもしれない。

その後も自分の信念に確信を持って生きている人だったので、多々、かみ合わないことはありましたが、大きな存在があり、特に短歌の創作に関してはありがたい示唆をたくさんいただきました。また、若いときの亡羊さんは何となく自殺顔をしているとよくは思っていました。何故かという

身近で自殺した何人かの人と共通の雰囲気を持っていたからです。今考えてみると、それは彼の才能から生じる狂気のようなものだったのかもしれない。

その後、堀越貴乃さんと結婚されてからはそんな気配がなくなり良かったと思っていました。女性の力は偉大です。

亡羊さんのXによると最後は頭を剃り坊主頭になられたようです。再度坊主頭になるということに意味は無いのかもしれませんが

が、何となく象徴的で、再生のための出発のように感じていました。自分より若い人の死は痛ましいですが、彼は彼の人生を全うしたと思います。病気の発覚後の所作振る舞いは泰然自若でした。

こうした感想は若すぎる彼の死を納得するための方便に過ぎないのかもしれませんが。

さようなら、奥田亡羊。

**田中薫** 昨年十月、佐佐木先生宅での校正日にお会いました。それが最後になるとは、ゆめ思わなかった。作業中の私たちの傍らで淡々と朋子さんと話されている声が時折聞こえたが、肺癌治療の為に編集業務の引継ぎだったことは後で知った。

稀有な才能の歌人だったと思う。最初の印象は、鋭くて少し怖いくらい若い若者。そんな奥田さんとは何故か関わる機会が多かった。全国大会では一度ならず評者の相手として組んだ。東京歌会の司会でも一緒にしたが、ある時、互い

の進行の役目も忘れて意見が衝突。隣でその様子を見ておられた先生が「君たち仲が悪いのか」と笑いながら仰り、皆も笑った事今は懐かしく思い出される。

矢部雅之さんの日本歌人クラブ

新人賞の受賞式の後、十人ほどで茶房に寄った折のことも印象深い。

並んで座る矢部、奥田両氏に「お二人は歌の勉強が心底好きなんでしょうね」と軽口気味の愚問を投げかけると両者、「はい」と即答。信綱の「お勉強なさいませ」という教え通りの二俊英は成るべくして、と改めて感じた。

一昨年、「心の花」一五〇〇号の責任者として奥田さんは尽力されたが、掲載された拙文中の信綱の言葉に胸を衝かれた、と仰る。

門人・梅野満雄の一周忌に、夫人宛に送られた書簡の一節である。「君の遠逝は、ただただ歎かはい。しかし、思へば、短い人の一生において、芸術のみは久遠の命を誇り得る。」亡き弟子への信綱

の此の語りかけに感動したと。奥田さんはこの時、僅か一年半後の自身の死など、微塵も考えなかったろう。が、今思えば恰も、近い其の日を予知した様な感受である。

信綱の言葉はそのまま、奥田さんの遺した歌「勉強」に裏打ちされた秀でた表現力と独特の感性、大切だと力説されていた「怖さ」を持つ作品群――を照らしていると思わずにはいられない。

**経塚朋子** 数年前、「経塚さん、高野山に行ってきましたよ。」奥田さんはここにこしながら告げられました。不調法な私は「まあ。」と、つられてにこにこして、そのまま会話は終わってしまいました。

なぜ高野山かというと、五年前、私が「高野」という高野山の連作で「心の花賞」をいただいたからです。その折、奥田さんには選考委員として評を賜りました。作品だけでなく、息子を亡くしてから三年続けて応募したこと、また人会以来、中断はあったが絶え

ず応募していたことも評価してくださいました。あの時なれどもっと踏み込んで、高野山のどこがどうよかったのかお尋ねしなかったのか。ぼんやりとした私の方が生き残ってしまいました。

二十数年前でしょうか。入会したての亡羊さんに初めてお目にかかったのは、東京歌会でした。「奥田です。」と礼儀正しくご挨拶され、以降、転居なさっていた時期を除いて、ずっと歌会で御一緒にさせていただきました。歌壇でご活躍され、ご結婚、二人子の父となられ、終止符が打たれるまで、早送りのような人生を遠く眩しく拝見しておりました。

誰もが想像もしなかった早すぎる死です。遺された三歌集、御存命であればその先に何冊が加えられたのでしょうか。惜しむ気持ちはきりもありません。

ご冥福をお祈りします。

**青木春枝** 亡羊さんが重篤な病と闘っていることは聞いていたが、



ご逝去の報に接して、これほど早くにと信じられなかった。歌人としてまだ若く、やりたい仕事も多かったはずと思うといかにも残念で悲しい。

亡羊さんに会ったのは、第一歌集『亡羊』を出版して間もなくのながらみ書房のパーティーだった。二次会で話しして、お互いの歌集を送ることとなった。『亡羊』は若さと意欲の溢れている歌集だった。

二〇二四年五月の東京歌会はずストに寺井龍哉氏がいらした。その二次会で、寺井氏を囲み亡羊さんや、加古陽さんたちと和歌や万葉仮名や西洋の詩との違いや、母音の多い和語と子音の多い欧州の韻律の違いなど、話題はあちこちに飛び、とても興味深く、楽しいひとときを過ごした。帰りは方向が同じだったので、神保町で下車するまで歌会の話などをした。とてもお元気だった。わずか一年前のことだ。何故このような悲報と

なったのだろう。決して個人的に親しかったわけではないが、話題が豊富で、教養があり、内容も充実していて、楽しいひとときを過ごせる歌人だった。もうすこし短歌の話などをしたかった。最後に、『短歌研究』五・六月号に掲載されている「路の花」より一首をひいて哀悼の意を捧げたいと思う。

・椅子にやすみ椅子にやすみて下りゆくそよ風のぼり来る春の坂  
大野道夫 奥田亡羊くんは誰もが認めるハンサムで有能な人であった。たとえばDVD「未来へ伝える言葉」「心の花」創刊一〇年記念インタビュー・朗読集」(二〇〇八年)は奥田くんの力作である。しかし、NHKを辞めてしまったことや複数回結婚と離婚をしたことに示されるように、どこかそのような自分をもてあまし、本人にも言ったことがあるが、「いてゆく」ようなところもあり、ちよつとはらはらすようなところがある後輩でもあった。

しかしまた先輩たちにはとても礼儀正しく、かつ「大野さん! 〇〇?」のような鋭い突っ込みも時にする後輩でもあった。  
そんな奥田くんの思い出としては、短歌研究新人賞授賞式のスピーチ(二〇〇五)で、自分は一九六七年六月五日に生まれたが、この日は第三次中東戦争(六日間戦争)が勃発した日であり、そのことを忘れずに生きていきたい、と言ったことがとても印象に残っている。

またフランスのマルチークの国際短歌フェスティバル(二〇一五)へご一緒したとき、「子どもたちが、お父さんが何か偉いことをしているように思っている」などと珍しく父親の顔を覗かせていた事も心に残った。その時のシンポジウムでも奥田くんは「卓上の逆光線」がころがして卵と遊ぶわれにふるるな(築地正子)に対して鋭い発言をし、私はそれを横から見ているのだが、そのような機会も

う永久に失なわれてしまったのである。  
・マイク持つ指は広がり亡羊くん「われにふるるな」はマリアの言葉」  
桐谷文子 二〇一八年より五年ほど奥田亡羊氏に講師として甲府なぎの会にいらしていただきました。毎回丁寧に準備をしてくださるき、的確なコメントにより一首一首が輝いてまいりました。特に言葉の運び方は、納得のできる具体的なアドバイスをくださいました。加えて奥田マジックとも言える穏やかな語り口と物腰の柔らかさにも惹かれ会員一同すぐにファンになりましたことはいうまでもありません。

個人的には、拙歌集の授賞式に甲府まで駆けつけてくださり、忌憚のないご批評をいただきましたこと、山梨県歌人協会の冊子『奈麻余美』に素晴らしい歌集評を書いてくださいました事など感謝にたえません。

諸事情で講師をお招きすること  
をしばらくお休ませざるを得なく  
なりましたのが残念でなりません。

あまりにも突然の発病とご逝去  
に呆然とするばかりですが、五年  
間のお導きで得られました作歌や  
読み方を今後に活かせますよう努  
めてまいりたいと思います。

・ なにもない大地に風が吹いてい  
た つかばくらがよるこびま  
すように 『男歌男』

武藤義哉 奥田亡羊さんにはいろ  
いろな場面で大変お世話になりま  
した。私が東京歌会幹事の当時は  
何かと個人的にアドバイスをいた  
だき大変助かりましたし、拙歌集  
に関しても出版後様々な形で支  
援いただきました。あまりに早い  
ご逝去、悲しい限りです。心から  
ご冥福をお祈りいたします。

山本陽子 奥田亡羊さんが生前に  
編まれた三歌集を読み返して、  
青空の歌が多いな、と新鮮に感じ  
た。自分が初めて参加した東京歌  
会は、中野サンブラザで夜開かれ

ており、当時司会者だった奥田さ  
んに、勝手に夜のイメージを抱い  
てしまっていたせいだろう。二次  
会の赤ひょうたんで、奥田さんに  
「あなたの作品は整っているね。  
でもそういう人は案外、伸びない  
んだよ」と言われた。学生短歌会  
のような空気感だった。

・ 奥村土牛の城を見上げる絵の奥  
のあんなところに青空がある

『亡羊』  
・ 穴を掘る青空高く土を放る心を  
放る気持ちよくなる

『男歌男』  
・ 春の日をひねもす蝶は青空に／  
ぶつかりながら突き抜けていた

『花』  
奥村土牛の城の歌は「心の花」  
一二九二号（平成十八年六月号）  
初出である。選者小紋潤氏の特  
選の一首であり、また、「今月の  
十五首（佐佐木幸綱・選）」欄の  
一首に選ばれていた。芸術を鑑賞  
した時の感動はこんな風に詠めば  
よいのかと目の醒める思いで歌と

評を読み、ときめいた。そのこと  
を奥田さんに伝えると、奥田さん  
は大学で美術史を学んでいたこと  
を話してくれた。実は、奥田さん  
とは同じ大学なのだが、学部と学  
年が異なる。仏像ガールに人気  
だった文学部の「日本彫刻史」と  
いう講義を他学部聴講したことを  
奥田さんに話すと、奥田さんは「そ  
れ、僕の先生の講義だ」と言っ  
ていた。

奥村土牛の「城」は、東京渋谷  
の山種美術館に収蔵されている。

